

人とのつながりをつくりだす版画教育

子ども同士のかかわりによる造形思考を生かした版画製作と
版画教育を通して子どもと社会をつなぐ「地域連携」

上北工部会

(青森県上北地方小学校教育研究会図画工作科部会)

代表

橋本	眞由美	(部会長)
堤	篤敬	(顧問)
小泉	仁一	(副部会長)
川村	英徳	(副部会長) ※執筆者
野坂	佳孝	(研究部長) ※執筆者
中嶋	潤	(副研究部長)
中田	大次	(副研究部長)
横濱	健	(編集部長)
葛西	励	(事務局長)
小西	久美子	(事務局員)
澤口	優子	(事務局員)
一戸	玲子	(事務局員)
高澤	綾子	(事務局員)
奈良	夕起	(研究推進部員)
田中	勝江	(研究推進部員)
戸澤	倫子	(研究推進部員)

概要

本研究部会は、青森県の上北地方小学校教育研究会の図画工作科部会である。今回の論文は、本研究部会が平成23・25・26年度に行った3年の研究をまとめたものである。

研究のテーマは、「人とのつながりをつくりだす版画教育」子ども同士のかかわりによる造形思考を生かした版画製作と版画教育を通して子どもと社会をつなぐ『地域連携』である。

具体的には、「1【学び合う】学習の過程で『周りの友だちの発言や様子』『製作の過程での友だちからの情報（良さや異なる自分の課題）』を取り出し、それらを作品に生かすことにより造形思考を高め、『思考力・判断力・表現力』を育てる段階」、「2【つながる】造形活動を通して、友だちや地域とつながることの大切さを体験し、『多様性を学び、協調性を育てる』段階」における教師の手立てと子どもの変容について実践研究を行った。平成23年度の実践では、版画学習と地域連携の在り方に、平成25年度の実践では少人数学級における版画指導の在り方に重点をおいた研究を行った。そして、平成26年度の実践では、学年107名という大人数にも関わらず、子どもたちは造形思考を高め合うかかわりの中で「ありがたいの版画」を題材に、意欲的に製作を進めることができ、さらに、地域の商店街の52店舗に作品を展示してもらい、大きな反響を得ることができた。

以上の3つの実践研究を通して、指導の仕方によっては、子ども同士のかかわり合いの中から作品を作り出し、さらに、その作品によって子どもたちと地域とのつながりも作り出せることがわかった。そして、これからの版画指導の在り方は、過去の「共同版画」の伝統を踏まえつつ、未来を生きる子どもたちに必要な主体性、多様性を育てることを目標にした「協働版画」へと学び方を変えていくことが重要であると考えている。

目次

I はじめに

II 研究の背景と研究テーマ

1 研究の背景

2 研究テーマ

(1) A 「子ども同士のかかわりによる造形思考を生かした版画製作」

【学び合う】

(2) B 「版画教育を通して子どもと社会をつなぐ『地域連携』」

【つながる】

III 実践研究

1 平成23年度 「法奥小なかよくナール」の実践

2 平成25年度 「未来の自分にみせたい木版画をつくらう」の実践

3 平成26年度 「『ありがたいの版画』を地域へ飾ろう」の実践

IV 研究の成果と課題

V おわりに

I はじめに

本研究部会は、青森県上北地方の小学校に勤務する有志教員で組織される上北地方小学校教育研究会（管内54校、会員723名）の中の図画工作科部会である。本研究部会では、毎月1〜2回の定例会をもち、部会の中心的な役割を担っている13名の運営委員と実践研究に取り組み研究推進部員との二人三脚で実践研究に取り組んでいる。具体的には、定例会において研究推進部員より実践の進捗状況等の報告があり、それに対して運営委員がアドバイスする等のサポートを行いながら進めている。本論文は、平成23・25・26年度の3年間、版画の実践研究に取り組んだ成果と課題をまとめたものである。平成23年度は、十和田市立法興小学校の奈良夕起教諭が「法興小なかよくナレ」と題して、小学校統合初年度の子どもの思いを地域へ発信する版画の実践研究を行った。この成果と課題をもとに平成25年度には、野辺地町立馬門小学校の田中勝江教諭が「未来の自分にみせたい木版画をつくらう」と題して少人数学級での版画の実践研究を行った。この2つの実践研究を踏まえて、平成26年度には、十和田市立南小学校の戸澤倫子教諭が「『ありがとうの版画』を地域へ飾ろう」と題して地域の商店街と連携した版画の実践研究を行った。以下、3つの実践研究の関連にふれながら、今後の版画教育の展望について述べる。

II 研究の背景と研究テーマ

1 研究の背景

かつて上北地方（十和田市、三沢市、上北郡）は「版画の上北」として全国的にも名を馳せるほど、版画教育に熱心な地域であった。その名残りが今も上北地方の各学校に残されている。それは、体育館やホール、校長室などに飾られている共同版画（90cm×180cm）の数々である。地域の風景や祭り等を彫ったものやそれらを連ねて屏風仕立てにした大作もみられる。こうした作品を見ると、版画製作にかけた当時の教師と子どもたちの情熱やつながりの深さ、作品を見た地域の方々の感動が今も蘇ってくる。しかし、現在は、このような共同版画の実践はほとんど行われていないのが実情である。確かに、平成10年の学習指導要領の改訂で図画工作科の時数が減り、共同版画のような大作には挑めなくなつたのは事実である。加えて、個人製作の版画の場合、その製作過程は、教師と児童1対1のかかわりが主になつており、教室に順番待ちの列ができるような様子が見受けられる。しかも、出来上がった作品は、コンクール等に出品して終わりという状況の中では、かつての共同版画製作に見られたような子ども同士のかかわりや地域とのつながりは望むべくもない。そこで、現状を打開し、版画教育の新たな展望を模索していきたいと考え、実践研究に取り組むこととした。

2 研究テーマ

(1) A 「子ども同士のかかわりによる造形思考を生かした版画製作」【学び舎】

本研究部会では、版画の製作において子どもたちの表現力を向上させるためには、「出来上がった作品を見る人」を意識させることが大事であると考えている。なぜなら、そうすることによって、子どもたちは「何を描くのがふさわしいのか」「どのように描くとうまく伝わるのか」「どのように白と黒を組み合わせれば分かりやすい画面になるのか」等と考え、造形思考が始まるからである。そして、この造形思考が独りよがりで、的外れなものに陥らないように、子ども同士でアドバイスし合うように学習の組み立てを図った。具体的には、「こうした方が上手く伝わるのでは？」とか「そこは黒にした方がはつきりするよ。」等とグループ内でアドバイスし合うのである。これらの取り組みを通して、お互いの作品の表現を適切に高めることができ、子ども同士のコミュニケーション能力も育成することができるのではないだろうか。加えて、作品が彫り上がった段階においても、子ども同士が協力して刷る活動を取り入れることで、更なるつながりを生み出すことができるのではないかと考えている。

(2) B 「版画教育を通して子どもと社会を

つなぐ」地域連携」【つながる】

描画の場合、コンクール等に出品してしまえば手元に残らないことが多いが、版画の場合

第50回教育美術・佐武賞

は、何枚でも刷り増しすることができる。こ

の版画の複数性を生かして、コンクール出品以外の版画作品の活用方法がないかと考えてみた。それが、地域の施設等に作品を展示して、地域の方々にも紹介していく等の地域連携の取り組みである。版画を製作する過程において造形思考させる際に、作品を見る対象を意識させることで造形思考が始まることを先に述べたが、作品を見た相手の反応が直に分かるように身近な地域の施設に展示し、地域の方々に見てもらおうのである。そうすることで、子どもたちは、自分たちの作品に対する反応がよく分かり、地域の方々も学校での教育活動の様子が分かるという、双方にメリットのある状況が生み出され、地域とのつながりも創造できるのではないかと考えた。更に、版画作品を使った地域連携は、展示場所や展示方法を工夫することによって、プレゼンテーション能力の伸長はもとより、様々な学びの可能性が期待できるのではないかと考えている。

Ⅲ 実践研究

1 平成23年度「法奥小なかよくナーレ」の実践（図1）

授業者 十和田市立法奥小学校

教諭 奈良 夕起

児童 第4学年26名

男子14名、女子12名

図1

学習の流れ（13時間）

学び合う

11時間

- ・ 版画を鑑賞し、表したい木版画のイメージをつかむ。
- ・ 彫刻刀の使い方を知り、下絵を描く時の注意点を考える。
- ・ 各自のスケッチを見せ合い、自分の表したい主題を決める。
- ・ 構図、下絵描き、白黒、彫りについて学び合う。



つながる

2時間

- ・ グループで協力して刷る。
- ・ 「なかよくナーレ」で展示することを考えて彩色する。



(1) 題材名 法奥小なかよくナレ
初めて取り組んだ木版画を

地域のみんなへ紹介しよう

(2) 実践の背景

十和田市立法奥小学校は平成23年4月に奥入瀬小学校と統合した。1学期はお互いに慣れない中で生活が始まったため、子どもたちの中のトラブルも多かった。そこで、初めての木版画製作を通して、お互いの良さを見つけ、助け合いながら学習することで、子ども同士のつながりをつくり出したいと考えた。また、統合後の様子を地域の方々にも知ってもらうために「新しい法奥小学校の良さや自分たちの地域の良さ」をテーマに木版で表し、出来上がった作品を地域の公民館や商店等に飾ってもらい、学区の人々へ思いを伝える「法奥小なかよくナレ」という実践に取り組むことにした。

(3) 研究テーマA【学び合う】の

具体的な取り組み

① お気に入り伝え合う

法奥小学校では、校内に版画作品がほとんど掲示されていなかった。そこで、教師が用意した10枚の木版画を教室へ掲示し、自分のお気に入りの版画にシールを貼らせて、表したい木版画のイメージをもたせた。すると、「僕は陸上練習の版画が好きだな」「私はお手伝いをしてる版画が好き」という声が自然に聞こえる中で、赤いシールが次々に貼ら

れていった。

② 木版画表現のポイントをとらえるためのギャラ

リートーク

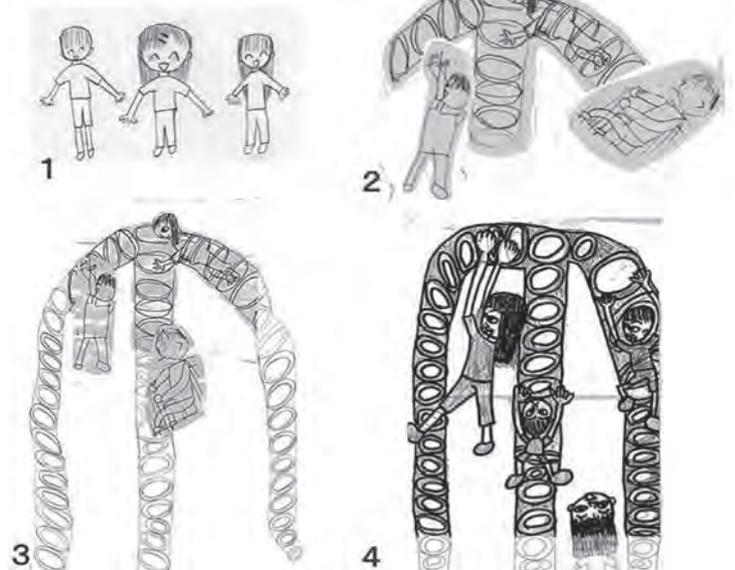
①で1週間掲示された版画作品の中からお気に入りの版画を選び、その版画の好きなところを友だちに紹介するギャラリートークを通して、木版画表現のポイント(主題、画面構成、彫り等)をとらえさせた。「僕は牛の世話をしている版画が好き。そのわけは牛の体が細かく彫られているから」「私はおばあちゃんの田植えを手伝ったことがあるので、田植えの版画が好き。機械でやる田植えと違って昔は手で植えていたのがわかるから」といった意見が交わされた。

③ 国内外の展覧会のスライドを見て、

意欲をもたせるための交流

教師が作成したヴェネチア・ビエンナーレ、越後妻有アートトリエンナーレ等のスライドを見て感想を話し合う活動を通して、自分たちも地域で「展覧会」を開きたいという意欲をもたせた。子どもたちは、ヴェネチアでの作品展示の素晴らしさや越後妻有の棚田が広がる風景と十和田市の風景が似ている点等を見つけ出し、全員一致で「なかよくナレ」

図 2



を開こうと決めることができた。

④ 見せ合い、分類し、話し合う

活動を通じた「自分の主題の決定」

夏休みに各自が描いてきた「スケッチ」を全員で見せ合い、それを分類する活動を行った。イワナ焼き、スキー教室、昆虫等12項目に分類された中から、自分が表したい主題を決めることができた。「僕はもちつきとスキー教室のどちらがいいか悩んだけど、友だちが『M君は去年スキー場に行つてスキーが上手になった』と言ってくれたのでスキーが上手な主題を決めた」というように、交流を通して全員が自分の主題を決定した。

第50回教育美術・佐武賞

⑤ グループによる「構図や下絵の学び合い」 〈図2〉

図2の1〜4は主題において「休み時間の遊びグループ」に入り、友だちとの学び合いによって造形思考を高め、下絵の描き方を工夫することができた児童の変容である。

・児童の感想より

「構図の学び合いで『高さを表すには縦にした方がいいよ』と教えてもらった。それから、上を見上げている友だちを増やしてみたら、下絵が良くなった」

(4) 研究テーマB「つながる」の 具体的な取り組み

① 地域と子どもたちの協働による価値創出

本実践のもう一つのねらいは、統合した法奥小学校と奥入瀬小学校の児童が、「新生法奥小学校」の仲間として学校生活で学んだことを表現した版画を、統合前の両学区の施設に飾ってもらう活動を通して、友だちの良さ、母校の良さ、地域の良さに気づき、新しい自分たちの学区を大切な故郷ととらえ、継続して学んでいこうとする意欲をもたせることであった。加えて、この展覧会を「法奥小なかくよくナレ」と名付け、放課後や休日に友だちや親子で鑑賞する活動を通して、友だちや保護者、地域の方々とふれあい、ふるさとを大切にしていこうとする豊かな心をもたせたいという教師の願いもあった。また、この学習について賛同してくれた地域の各商店や施設から「ぜひ、4学年以外の学年も展示して

欲しい」という要望があり、「なかよくナレ」は冬休みの期間に、全校の児童と保護者が地域を巡り親子で版画や描画を鑑賞できる活動となった。

② 期間

平成23年12月12日(月)〜平成24年1月15日(日)

③ 展示場所

十和田湖公民館、奥瀬郵便局、さかやかまど商店、道の駅おいらせ、奥入瀬源流水工場、ノースビレッジ、森のホテルの計7カ所に全校児童の123作品を展示していただいた。

④ 地域の声より

ア「雪が降ると閑古鳥が鳴きます。そんな冬の時期に、親子でお店をまわってもらえるなんて涙が出るくらい嬉しい話です」商店主

イ「奥入瀬溪流は秋までが集客のピークです。冬場はこういった活動があると助かります。ホテルとして全面協力します」ホテル支配人

⑤ 児童の声より

ア「奥入瀬小と法奥小の間にあるイチヨウの木は大切な木

だから、みんなで手をつないでまわった
思い出を版画にした」

〈図3-4〉

イ「奥入瀬小から法奥小に来て友だちが増えた。そのことを版画にして、森のホテルに飾ってもらった。お母さんもほめてくれた。なかよくナレのおかげで法奥小がますます好きになった」〈図3-5〉

図3



図 4

学習の流れ（13時間）

学び合う

11時間

- ・「上北の版画DVD」を鑑賞し、木版画のイメージをつかむ。
- ・各自のスケッチを全員で見せ合い主題を決める。
- ・本当に表したいものを考えながら下絵を描く。
- ・紙版画の技法を使いより良い構図を工夫する。
- ・基本的な技法、白黒の決め方、彫り方、刷り方について学び合う。



つながる
2時間

- ・他校の4年生と感想交流をする。

2 平成25年度

「未来の自分にみせたい木版画をつくらう」
の実践（図4）

授業者 野辺地町立馬門小学校

教諭 田中 勝江

児童 第4年生5名 男子1名、女子4名

（1）題材名 未来の自分にみせたい
木版画をつくらう

自分とふるさとを見つめる版画づくり

（2）実践の背景

野辺地町立馬門小学校の4学年児童は少人数のため多くの人と交流することに慣れていないため、自分の思いを表すことを得意としないという実態があった。また、商店や公共施設も少ない学区であったため、平成23年度法奥小実践のような「地域に版画を展示する活動」は難しいと考えられた。そこで、教師の働きかけの工夫により、児童が自分で「主題」を見つけ、少人数という条件の中でも「表現力」や「多様性を認識する力」を身につけるための手立ての研究に絞った実践に取り組んだ。

（3）研究テーマA

【学び合う】の

具体的な取り組み

① 伝達相手は未来の自分

地域の施設等に展示して多くの人々に見てもらうことが難しいという条件を克服するために伝達相手を「未来の自分」とした。「未来の自分にみせたいものは何か」という教師の問いかけに5人で話し合った結果、「今生懸命にがんばっている自分の姿をみせたい」「大好きな馬門の海を残しておきたい」「家族との大切な時間を版画にしたい」と各自が自分の描きたいイメージをもつことができた。

② スケッチブックを使つての交流

次に、クラス全員で夏休みから描いていたスケッチブックを見せ合い、ギャラリートークを行った。スケッチブックの絵が少なかった一人の男児は「プールで泳いだこと」を下絵に描き始めた。それを見た周りの女児が「夏休みに地域のお祭りに参加してがんばっていたじゃない。それを版画にするといいよ」と薦めた。「そうだよ。町の祭りはここにしかないんだよ」と別の女児。しかし、男児はすぐには祭りの下絵を描けなかった。そこで、スケッチブックに祭りの太鼓を叩く場面を描いてきた他の女児が、その絵を見せてくれた。すると男児は、その絵を参考に、祭りの衣装を着て鐘を打ち鳴らしている自分を描き始めた。（図4の版画）

③ 紙版画の技法を活用した構図の工夫

ア絵に自信のあるA子は、父と行った釣り

第50回教育美術・佐武賞

少人数という条件の中でも「友だちとのかかわりの中」で自分の課題を解決し、版画を完成させることができた5名の児童のために、本研究部会では、おいらせ町立百石小学校の4年生との「版画交流」をコーディネートした。交流の観点は「彫り方」「人の動き」「聞こえる声や音」とし、それについて百石小の子どもたちも付箋へ書き込んでもらった。馬門小4年生の5名が何よりも喜んだことは、自分の版画へ30人も他校の友だちから様々な観点で感想をもらえたことであった。子どもたちは認められることの満足感・成就感、自分の表現が相手に伝わることの喜びを感じていた。

(4) 研究テーマB「つながる」の具体的な取り組み

の思い出を細かく丁寧に描いていた。しかし、主題に合わせて必要なものだけを描いている友だちの下絵と自分の下絵を見比べて、筆が止まった。

〔図5-1〕

イそこで、低学年で取り組んだ紙版画の技法を使い、下絵の構成を考えさせた。

〔図5-2〕

ウその様子を見ていた他の4名の児童の励ましも受け「何だか自信がもてた。涙が出てきた。」と喜び、その後は意欲をもって版画製作に取り組んだ。

〔図5-3〕

図5



1 最初の下絵



2 下絵の構成



3 構成をもとにつくりあげた下絵

「『ありがとうの版画』を地域へ飾ろう」の実践

授業者

十和田市立南小学校 教諭 戸澤 倫子
児童

第6学年107名

(うち担任する3組児童は36名)

(1) 題材名 「ありがとうの版画」を地域へ飾ろう

図6 学習の流れ(14時間) 一斉指導は1組から3組までの107名で行う

時間	1	2,3,4,5	6,7	8,9,10	11,12	13,14
形態	一斉指導	各学級	一斉指導	各学級	一斉指導	各学級
学習内容	見通し 人物描写	主題決定 下絵描き 下絵直し	陽刻・陰刻 彫刻刀特性 こすり出し	転写 白黒決め 彫り	彫りの手本 自分で刷る	商店街へ 展示
手立て	スライド1 版画ノート	スライド2 チェックシート	スライド3 版画の彫り		教師の手本	

学び合う(12時間)

つながる
(2時間)

自分の下絵をチェックしてみよう

図7

	チェックの観点	○	△	×
1	伝えたいことは決まった	✓		
2	記念写真ではない		✓	
3	人物をななめに配置している		✓	
4	一人一人の位置を考え体の向きも加えている		✓	
5	腕や足の動きはある	✓		
6	表情やどんなことを話しているか伝わる	✓		
7	主役と脇役はいる		✓	
8	見る角度は対象をとらえている		✓	
9	主役の大きさは画面に対してちょうどいい		✓	
10	ものどもの関係、主役とまわりの関係はよい		✓	
11	彫刻刀で彫ることができる		✓	
12	画面の人物やものを動かすともっと良くなりそうだ	✓		

(2) 実践の背景

十和田市立南小学校は市内の中心部に位置し、昭和の時代から全校で版画教育に取り組み伝統ある学校である。現在でも、卒業式にはかつての卒業生が製作した六曲一双の屏風の「共同版画」がステージに立てられ、卒業生や在校生、職員や来賓に親しまれている。教育課程の柱に「全ての教育活動を通して子どもと社会をつなぐキャリア教育」を掲げ、6学年児童はこれまでに様々な体験活動を行っている。そこで、自分たちの学びを

支えてくれた多くの方々に感謝の思いを伝えるために「ありがとうの版画」を題材として、製作活動へ取り組みことにした。

(3) 行列のできない版画指導

学年107名で取り組むことにしたがこれまでの経験から「先生、ここはどうすればいいですか」という児童が、教師の前に次々と現れる状況をどう改善していくかという点が課題であると考えた。そこで、木版画製作に必要な基礎的な知識や技能を指導する時間(一斉指導)と話し合いという言語活動を通して、自分で取捨選択、自己決定するための時間(各学級での指導)を組み合わせることとした。(図6)

(4) 研究テーマA【学び合い】の具体的な取り組み

① 学習の見通しをもつためのスライドを使った交流

これまでの自分たちの学習が学校、家庭、地域の連携に支えられていたことに気付かせ、感謝の思いを込めた「ありがとうの版画」を地域に展示し、思いを伝えたいという意欲をもたせるためのスライドを作成し、話し合させた。

② 版画ノートを活用した交流

これまでの実践研究の成果と課題を生かした「版画ノート」を作成。常に持ち歩き、「ありがとうの種をさがそう」のページには自分

第50回教育美術・佐武賞

図8



下絵チェックシートを活用しての話し合い



お互いにモデルをつとめ下絵に生かす

図9



最初のスケッチ



グループ学習後の下絵



最初の下絵 友だちからの付箋

図10



2人で向き合い、刷っていきける流れをつくる。このような場を数カ所設定する。

図11



の描きたい主題をたくさんメモし、自己決定できるようにした。

また、「下絵を描く時のポイント」も載せて図工以外の時間でもスケッチを描きためることができるようにした。

③ 下絵チェックシートを活用した交流

児童が互いに構図等を検討し合うための観点をもたせる手立てとして、下絵チェックシートを活用した。(図7)

ア 児童の感想より

「ボウリングのコーチにありがたうの気持ちを伝えたいと思っていた。友だちは陸上練習を支えてくれた人への感謝の気持ちを主題にしたいと考えていた。下絵チェックシートを見ると僕たち二人は『腕や足の動きはある』

のところが描けていなかったもので、お互いにモデルとなってポーズを取り合った」(図8)

④ 付箋を活用した交流

平成25年度の馬門小学校の実践では子どもたちは交流した学校の児童から付箋で感想をもらったことを喜ぶという成果がみられた。そこで、今回はその付箋による交流方法を活用して、友だちの下絵に「下絵チェックシート」の観点でアドバイスし合うという活動を取り入れた。

ア 児童の感想より

「家の屋根の工事に来てくれた大工さんへありがたうという主題に決めた。下絵をグループのみんなに説明した後、付箋で感想をもらった。『ありがたうの気持ちは伝わるが主

役が誰だかはつきりしないのでそこを直したほうがいい」とか『屋根の高さがわかるように縦の画面にした方がいい』等と書かれていた。確かにその通りだと思っただので、主役を大きくし、縦の画面にして描き直した」(図9)

⑤ 刷りの場を設定しての交流

最初に教師が刷り方の手本を見せ、その後、子どもたちが協力して刷り上げることができるよう「刷りの場」を学年の廊下へ4カ所設定し、107名という大人数でも取り組めるように工夫した。(図10)

ア 担任の声より

「普段は口数の少ないF君は多忙で中々時間のとれない医師のお父さんと2人でお寿司を食べた思い出をありがたうという気持ちを込



1/20 回収時



12/16 商店主に各自が依頼

図 12

めて製作していた。2人の友だちが手伝ってくれて、学年で一番最初の刷りができた時、本当に嬉しそうな表情をしていた」(図11)

(6) 研究テーマB「つながる」の

具体的な取り組み

① 地域と子どもたちの協働による価値創出

これまでの版画製作では「自分のこと」という題材が主であった。しかし、今回は「ありがとうの気持ちを伝える相手のため」「商売用のポスターを外してまでも自分たちの版画を展示してくれる地域の方々のため」に努力する姿がみられた。相手意識をもち、「誰

3



2



1



図 13

かのため」に努力した体験、誰かの役に立ちたいと思う行為に対する周囲からの応援は、子どもたちにとって「大人になっても誰かの役に立ちたい」という思いにつながったのではないかと考える。

② 期間

平成25年12月16日(火)～平成26年1月20日(火)

③ 展示場所

連合商店街へ依頼し、協力を得られた52店舗に展示

④ 地域の声より

ア「版画はいいですね。このような商売をしているとポスターを貼って欲しいと依頼があるのですが、どんなにお金をかけたポスターよりも子どもが一生懸命に彫った跡が見える版画はいつまでも貼っておきたい気持ちになります。来客のみさんとも版画一つで話が弾みました」

イ「うちの店は十和田市現代美術館とも連携して多くのアーティスト作品を展示してきました。でも、学区の子どもたちの版画は宝物です。ですから、店員とオリジナルの額を作って飾らせてもらいました。次は商店主の似顔絵を子どもたちにも作ってもらって、町を盛り上げたいねと話合っています」(図12)

⑤ 児童の声より

ア「僕の心の中には運動会や修学旅行先の函館市までフェリーで来てくれた十和田市のゆるキャラにありがとうの気持ちがあった。主人公をゆるキャラにするとなかなか下絵が描けなかった。そこで、運動会で頑張っている自分とそれを応援しているゆるキャラにしてみた。彫刻刀で彫るのが大好きなので、くぐる網や空気の流れを工夫して彫った。何よりもたっさんのアドバイスをしてくれて、刷りの手伝いもしてくれた友だちにありがとうの気持ちがいってきた」(図13―2)

第50回教育美術・佐武賞

IV 研究の成果と課題

以上、3つの実践研究を行った結果、次のような成果と課題が明らかになった。

(○) 成果 ▲ 課題

○ 下絵づくり(構図を考える場面)や白黒決めの各段階で、子ども同士がグループでアドバイスし合うことは、版画の表現を向上させるためにも、子ども同士の間が、実践を通して明らかとなった。

○ 子ども同士でアドバイスし合う(造形思考させる)場合に、子どもたちに観点を明確にもたせることで、相互のアドバイスの外的外れにならずに、集団による造形思考をうまく機能させることができた。

○ 版画作品を使った地域連携を通して、子どもたちと地域の方々との間に新たなつながりをつくり出すことができた。

▲ 版画作品を使った地域連携は、地域へのPRを十分に行ったり、ウォークラリー等のレクリエーション的な要素を盛り込んだりしないと、より多くの地域の方々を巻き込んだ活動にはならないことがわかった。

V おわりに

「共同版画」から「協働版画」へ

先日、十和田市立南小学校6学年の卒業式が行われた。ステージには昭和50年代の卒業

生200名が製作した共同版画の屏風が飾られていた。その会場を取り囲むように107名全員の「ありがとうの版画」も飾られた。

(図14)

『まっなみきの校舎』という昭和時代の共同版画は技術指導が行き届いており、今見ても当時の指導方法のレベルの高さ、また、放課後遅くまで残って1枚のベニヤ板を分割して彫り進めてきた200名の子どもの思いが伝わってくる。しかし、現在の107名がありがとうの思いを形にし、個性や多様性が見いだせる「ありがとうの版画」も在校生、保護者、来賓らが目を細めて鑑賞していた。6学年児童の一人は卒業前の感想文で次のように書いてくれた。「版画は先生の言うとおりにしなくてはいけないもの、描きたいことはあるのにどう表せばいいのかわからないもの、賞に入った人は喜べるけれどそうじゃないと残念な思いをするものと思っていました。けれども、ありがとうの版画は自分でつくって、他の人のつくったものを見て、友だちがどんな思いでつくったのかわかり、自分のつくったものもわかってもらえる達成感があるものでした。人に対して感謝する気持ちが生まれ、笑顔で卒業を迎えられました」

技術指導の得意な教師が



たった一人の子に賞をとらせても、学年や学校全体のレベルは上がるわけではない。「学び合い」の仕組み、その指導の「手立て」を考え、チームの組織力を生かして取り組むことが機能すれば子どもたちの学びは変わっていく。過去の「共同版画」の伝統を踏まえつつ、未来を生きる子どもに必要な主体性、多様性を生かした「協働版画」へ変革し、地域連携を工夫していけば、版画教育による人と人との相互理解や地域の活性化ができることが明らかになった。今後も、子どもたちが版画教育を通して、他者を感じる力を鍛え、自分ができることで人とつながり、社会とつながり、「社会の中で生きる自分の人生をより豊かなものにしていく力」を養うことができるように、実践を積み重ねながら、地域での版画教育を発展させていきたいと考えている。